

ティーチング・ポートフォリオ

村山 詩帆 (Shiho MURAYAMA)

高等教育開発センター (Center for Research and Development in Higher Education)

佐賀大学 (Saga University)

No image
available



2009年9月25日

目次

- 1) 教育の理念
- 2) 教育の責任
- 3) 教育の方法
- 4) 授業評価
- 5) 学習成果
- 6) 教育改善
- 7) 組織的な教育活動への貢献
- 8) 今後の目標
- 9) 添付資料
 - 2-1 : 佐賀大学憲章に示される教育の基本的な目標等
 - 2-2 : 文化教育学部 of 目標
 - 2-3 : 教育学研究科 of 目標
 - 3-1 : オンラインシラバス
 - 3-2 : 佐賀をめぐる進学・就職イメージ調査
 - 3-3 : 教育社会学用語・人名解説
 - 3-4 : 授業配布資料 (教育社会学)
 - 3-5 : オリエンテーション (2 試験問題と解答例)
 - 3-6 : 囚人のジレンマ・ゲームの対戦結果
 - 3-7 : 受講者へのコメント
 - 3-8 : 予備討議①資料
 - 5-1 : 成績判定資料 (教育社会学)
 - 5-2 : 佐賀大学高等教育開発センター編 『大学教育年報』 第 3 号, 53-61 頁
 - 6-1 : 授業配布資料 (進学・就職の地域間移動に見る佐賀)
 - 6-2 : 授業配布資料 (学級集団心理学・生徒指導特論)
 - 6-3 : 授業配布資料 (進路指導特別演習)
 - 7-1 : 第 54 回九州地区大学一般教育研究協議会の部会発表資料
 - 7-2 : 第 58 回九州地区大学一般教育研究協議会の全体発表資料
 - 7-3 : 教養教育運営機構「履修相談 Q & A」
 - 7-4 : 学生対象アンケート、卒業・修了予定者対象アンケートの報告書 (表紙)
 - 7-5 : 信州大学全学教育機構訪問調査報告書
 - 7-6 : 秋期 (9 月) 入学に関する調査結果報告
 - 7-7 : 第 11 回大学教育研究フォーラム発表資料
 - 7-8 : 日本教育社会学会第 60 回大会発表資料
 - 7-9 : 若手研究 B 様式 S-1-12
 - 7-10 : 先導的の大学改革推進委託事業実施計画書
 - 7-11 : 佐賀大学高等教育開発センター編 『大学教育年報』 第 5 号, 44-53 頁

1) 教育の理念

私は次世代の若者とともに、社会を少しでも「望ましい」姿にしていくための構想を練り、その構想の実現を目指したい。このため私は、大学教員として社会の「望ましき」を構想するため学究活動に取り組み、その内容をさまざまな方法を用いて次世代を担う若者である学生に伝えている。

社会の「望ましき」とは、自ら考え、実践する筋道を先行世代が示してみせてはじめて、次世代の若者が責任をもって構想することができる。しかし、社会の「望ましき」を考え、実践するのは決して簡単なことではない。社会の「望ましき」を考えるには極めて複雑な思考実験が欠かせないし、社会の「望ましき」に基づいて実践するには、目先の個人的な利益を諦めなければならない状況にしばしば直面する。目先の個人的な利益より社会の「望ましき」を優先する生き方は、目先の利益にばかり拘らずにいられるある種の強さがないと実践するのは難しい。また、そのような強さは個人の努力によってのみ獲得できるわけではない。社会の「望ましき」をもたらすよう、あらゆる学生にただ「強くなれ」と駆り立てるばかりでは、強くなることの難しさに直面して自らの弱さを突きつけられるだけになったり、自滅するまで無理をして強くあろうとする学生を生み出したりしかねない。滅私奉公を美德とし、若年世代にそれを強いるような教育は、社会の「望ましき」を実現することにはならないだろうから、私はそのような教育を行うことを厳に慎もうと思う。

目先の利益に拘らない強さがありそうな学生、社会の「望ましき」を目先の利益に優先させる人々を理解し、協力できそうな学生もいれば、そうした人々に共感を覚えながらも協力することができない学生もいるだろう。このことを念頭に、向き合った学生がどのような状態にあるのかをそれとなく診断することが大切である。そして、学生の状態に合わせて、目先の利益を優先しがちな弱さを見守りつつ、目先の利益に拘らない強さや、その強さを理解し、協力していけるような知性を少しでも育んでいきたい。

大学教員としての私の役割は、学生が社会の「望ましき」についてできるだけ複雑な思考実験を重ね、それを柔軟に自らの実践に結びつけられるよう、教育を通して働きかけていくことにありと信じている。このような役割を果たすための私の基本的な教育の理念は、次の3つである。

- (1) 私の専門領域である教育社会学を中心として、社会の「望ましき」に関わりのある教育学、社会学、経済学、心理学の分野における知見を広く紹介し、学生が柔軟に人文・社会科学の方法を実践的な課題に役立てられるよう手助けする。
- (2) 社会の「望ましき」といった規範的な命題が、重苦しく、受け容れがたいものになってしまうのを避けるため、受講生が私になるべく親しみを感じてくれるよう心がける。
- (3) 学生には誠意と公平さをもって接し、私が授業で発言した内容を自ら裏切ってしまうような実践はしない。

2) 教育の責任

私は専任教員として所属する佐賀大学において、2008年度までに5つの科目について講師を担当してきた。これらの科目は教養教育の主題科目、学部生を対象とした教職科目、大学院生を対象とした専門教育科目である。教養教育科目の主な受講生は、文化教育学部、経済学部、理工学部の学部生であり、教職科目は文化教育学部を中心として、経済学部、理工学部、農学部の学生が履修している。大学院の専門教育科目については学校教育専攻のみならず、教科教育専攻の大学院生が例年履修して

いる。

いずれの授業科目についても、佐賀大学憲章に示される教育の基本的な目標等（添付資料 2-1）に基づいて定められた開講部局の目標（添付資料 2-2 及び 2-3）に則って、授業の設計を行うようにしている。あくまでこの前提に基づき、私の教育理念が実現できるよう教育の方法等を工夫している。

表 2.1 担当する授業科目の概略

科目区分	科目名	カリキュラムにおける位置づけ	分担	開講	受講生数
教養教育科目	進学・就職の地域間移動に見る佐賀	教養教育科目の主題科目：共通主題科目「地域と文明」	代表 (単独)	毎年	7～15
教養教育科目	「佐賀」入門～本当の「佐賀」を探る～	教養教育科目の主題科目：共通主題科目「地域と文明」	代表 (分担)	隔年	16
専門教育科目 (学部)	教育社会学	文化教育学部の専門教育科目：教職科目（選択必修科目）	代表 (単独)	毎年	50～60
専門教育科目 (大学院)	学級集団心理学・生徒指導特論	教育学研究科の学校教育専攻の選択科目	代表	毎年	11～19
専門教育科目 (大学院)	進路指導特別演習	同上	(単独)	毎年	7～11

3) 教育の方法

共通する特徴的な方法や方針

私はいずれの授業科目においても、先に述べた教育の理念にしたがって、社会の「望ましき」を意識しながら、私の専門分野の知識のみならず、広く人文・社会科学の研究から得られた成果を受講生に紹介することにしてしている。また、授業が一方的な講話に終わらないよう、何らかのかたちで質疑応答の機会を設け、受講生とのコミュニケーションを図っている。このコミュニケーションによって、私は授業に対する受講生のコミットメントの状態や理解度を知ることができ、受講生にとっては、それまで自らが抱いていた理解とは異なった理解に至ることが期待できる。

なお、私が受講生とコミュニケーションをとるにあたっての留意点を示すと、以下のようなになる。

- (1) 受講生随時学生からの質問を受け付けている。
- (2) 受講生の発言内容が特定の知識に偏っている場合、相容れない知識をあえて提示する。
- (3) 受講生が多い授業の場合、授業に対するコミットメントが低下していると思われる受講生や、講師を注視しているなど、質問がありそうな表情をしていると思われる受講生に質問を促す、あるいは質問を投げかける。
- (4) 受講生が少ない授業の場合、プレゼンテーションを課し、質疑応答を行う。

私が担当している授業科目は文化系に属するものであるが、同じ文化系に属するさまざまな専門分野と内容が重複する部分がある。また、いずれも選択科目や選択必修科目となっている。このため、私が専門とする分野の知識を受講生に押付けることによって、異なる専門分野のもつメリットを発見してもらい機会を逸したり、過度に抑圧的な授業になってしまったりする恐れがある。このため、特定の事項について、異なる見解があれば、専門分野が違っていてもその紹介に努め、いずれの専門知識を正統とみなすか、あるいは判断を保留しておくかは受講生に委ねることにしてしている（添付資料 3-1）。

成績判定にあたっては、受講生に特定の専門分野の知識を押付けけないという教育方法の方針に従い、レポートを主な評価材料として活用している。成績判定に先立って、レポートの内容が感想文に終わらないよう、あらかじめ受講生に採点方法を開示している。具体的には、「講義の接点」、「テーマの設定」、「論理の展開」の3つの観点を設けて採点することとし、採点例をWeb上のオンラインシラバスや当日配布資料に記載して周知を図っている（資料3.1）。

資料3.1 シラバスの成績評価基準

第1回 オリエンテーション(1シラバスの説明)

1. 講義との接点(1ポイント)

2. テーマ(主題)の設定(5ポイント)
 ※全体を通して、ある程度絞られた観点に基づいて論述されていること。

(採点例)

a. テーマらしいものがまったく見当たらない。(0ポイント)

b. かすかにテーマらしいものがある。(1~3ポイント)

c. 一貫性や明晰さにやや欠けるもの、テーマがある。(4ポイント)

d. 一貫性のあるテーマが、明確に設定されている。(5ポイント)

3. 論理の展開(14ポイント)
 ※自らのテーマ(主題)について、具体的・論理的に説明されていること。

(採点例)

a. ありきたりな一般論、トートロジー(同語反復)に終わっている。(5ポイント)

b. ありきたりな一般論から脱して、自分なりの論述になっているもの。(6~8ポイント)

c. 具体的な例を提示して、テーマの設定に努めている。(9~11ポイント)

d. にくわえ、論理が緻密になっている。(12~14ポイント)

4 出典: 教務システムLive Campusのオンラインシラバス <<https://l.c.ac.admin.saga-u.ac.jp/kyoumu/LL/html/start.htm>>

出典) 教育社会学の第1回配布資料 (2009年度版)

特定の授業科目における戦略と目的

● 進学・就職の地域間移動に見る佐賀

この授業は、地域に関わる身近な諸課題について具体的に学び経験することを通して、問題発見力と課題解決力を養うことを趣旨とする、教養教育の共通主題科目「地域と文明」として開講している。こうした趣旨に即して、進学・就職の地域間移動の動向に注目し、既存統計データの分析のみならず、質問紙調査や聞き取り調査を設計し、実査までを受講生に自ら行ってもらい、最後にプレゼンテーションを課している（添付資料3-1）。

ここには人文・社会科学の方法を試してもらうための、次のような戦略がある。(1)自らが抱いている佐賀に関するイメージを受講生同士の討議を通して明確に意識化してもらう（添付資料3-2）。(2)中央官庁等が公開している既存統計データを用いて、自らが抱く佐賀に関するイメージと対比させることにより、佐賀に対する理解を相対化しつつ、既存統計データの所在、活用法についての知識を修得できる。(3)実際に調査を行ってもらうことで、調査を設計することの難しさや依頼状の書き方など、社会一般で活用できる実践的な知識を身に付けることができる。

ただし、既存統計データには中央官庁等のWebサイトから閲覧できるものがあり、時間をなるべく節約するために、それらを活用することを推奨している（Webサイトから閲覧できるもの以外についても、資料を配布して周知している）。依頼状については、私が雛形を用意し、これに受講生が適宜修正を加えたものに私がコメントし、作成してもらうようにしている。

● 「佐賀」入門～本当の「佐賀」を探る

本授業も、教養教育の共通主題科目「地域と文明」として、2008年度からオムニバス形式で隔年開講している。この共通主題科目は、教養教育の実施組織である教養教育運営機構に設置されている「地域と文明」部会において、「佐賀学」のわかりやすく、面白い、入門的な授業科目を提供したいとの要望を受けて、開講する運びとなった。「わかりやすく、面白い、入門的」な授業にするため、①佐賀の地勢、②佐賀の経済、③佐賀の医療、④佐賀の教育からなる4つのテーマを設け、それぞれの領域に関する研究活動実績を有する教員が講師を担当している（添付資料D）。私が担当したのは、オリエンテーションと佐賀の教育に関する4回分である。

講義にあたって、会場を佐賀市の中心市街地にある地域貢献推進室分館（ゆつつら～と館）に選んだ。ここには、空洞化してしまった中心市街地を教室にすることで、佐賀の経済事情をより鮮明に実感してもらおうという狙いがある。

● 教育社会学

教職科目である本授業では、教職を志望する受講生が教員採用試験に対応しやすいよう、過去に試験問題として出題されたことがある事項を「教育社会用語・人名解説」にまとめて配布し、その中から客観式の試験問題として定期試験で出題している（添付資料3-3）。また、15回の講義中、1回分程度は受講生の状態や研究動向、あるいは社会の趨勢に配慮して、「教育と労働社会」などのテーマを別途に設定し、補論として講義を行っている（添付資料3-4）。

また、例年60名くらいの受講生がおり、授業中の質疑応答だけでは授業内容の理解度がわからないため、第2回の講義でレディネステストを実施し、小テストを課している（添付資料3-1）。ただし、小テストは出欠状況や、著しく理解度が低そうな学生がいないかを確認するためにのみ実施するもので、テスト結果それ自体を成績評価に反映させることはしない。成績判定にあたっては、定期試験期間中に行う記述試験の結果に最大のウェイトを置いている。この理由は、レポートをただ提出するだけにした場合、Webサイトの記事をコピー&ペーストする学生が出てくる恐れがあるからである。レポートが剽窃されたものであるかをチェックし、学生の処分を考えるよりも、剽窃の余地をできるだけ小さくする方が望ましい。そこで私は、定期試験に記述問題を課し、論述に必要な事項は事前に調べ、それを箇条書きにしたメモ程度であれば、試験会場に持ち込むことを許可している。この措置により、受講生は解答に際してあらかじめ何を書くかを自ら定め、自主学習するよう促される（添付資料3-5）。

● 学級集団心理学・生徒指導特論

大学院の授業科目である本特論では、個人の合理的な行動が全体利益を損ねるケースがありえても、個人同士が協力し合うことがいかに難しいかを体験してもらうため、繰り返しのある協力/非協力の選択ゲームによるコンテストを開催している。コンテストの結果は表にまとめ、なぜそのような結果になったのかを受講生に論評してもらってから、私からこのゲームにおいて安定的に高得点を稼ぐ戦略について説明を行っている（添付資料3-6）。さらに、この戦略が実際の学級や社会でどのように駆使されているかを、調査データの分析結果に基づいて紹介し、学級という制度において前提されているクラスメート関係がしばしば緊張を孕んだものであることを解説している。

また、受講生全員にプレゼンテーションを課し、質疑応答を行っているが、授業中にプレゼンテーション内容の根幹を否定するような批判的な質疑が出されることは滅多にない。これではプレゼンテーションの内容や技法が洗練されにくいものの、受講生の中には批判的な質疑に著しく自尊心を傷つけられ、批判的な質疑に耐えられないケースがある。そこで、受講生のプレゼンテーションについて

1 人ずつ個別にコメントを作成し、コメントを参考にしてプレゼンテーション内容を推敲したものをレポートとして提供してもらうようにしている（添付資料 3-7）。

● 進路指導特別演習

本演習も大学院の授業科目として開講されるもので、講義と討議を交互に実施することによって、受講生に進路指導をめぐる政策動向を理解するとともに、進路指導が潜在的に果たしうる役割をできるだけ自主的に導出してもらっている。

具体的には、受講生が進路指導に資する実践的な解答を得られるよう、予備討議と本討議を合わせて計 4 回の自由討議の機会を設けている。ただし、進路指導に関わりのある通俗的な理解を相対化し、現実的な進路指導のあり方について考究してもらうため、例えば「なりたい自分になる」や「生きる力」などの進路に関わりのある言説を選び、それらをキーワードにして進路指導の問題が導き出されるよう、必要最小限の働きかけを行っている。また、討議資料として 1 枚のシートを受講生にあらかじめ配布しておき、討議ではまずこのシートに基づいて意見を述べてもらうようにしている（添付資料 3-8）。

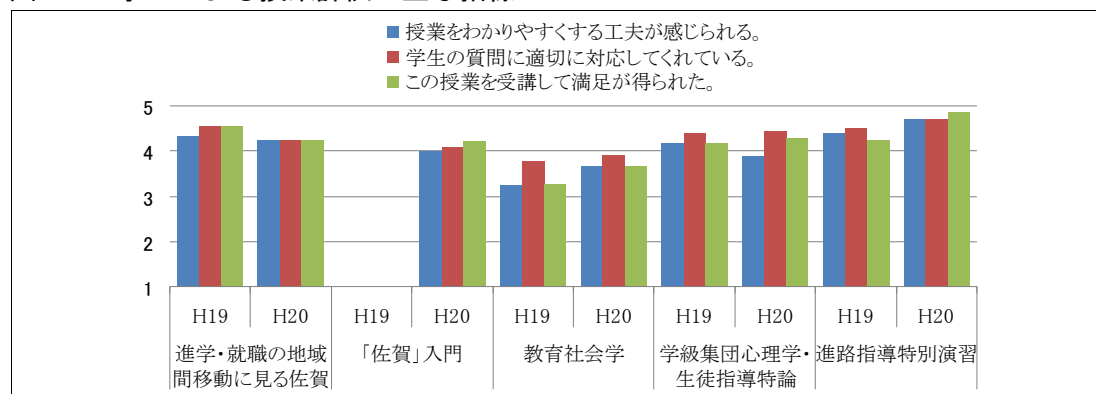
この自由討議の間に、(1) 学習指導要領を含めた進路指導に関連する法規等を紹介し、進路指導をめぐる政策的な動向について読み解いている。(2) 教育達成・職業達成の実証研究から得られた教育学、社会学、心理学、経済学の知見を整理し、教育機関から労働市場への移行を体系的に理解できるよう情報提供を行っている。

4) 授業評価

佐賀大学では、平成 12 年度から学生による授業評価を導入しており、私が担当するすべての授業科目で学生による授業評価を実施している。ここには、授業内容及び授業方法、教員の対応、満足度など、授業評価の定量的なデータと自由記述による定性的なデータが含まれている。

私が担当する授業の戦略と目的に関わりのある質問項目としては、「授業をわかりやすくする工夫が感じられる」や「学生の質問に適切に対応してくれている」がある。これらの質問項目に対する 1～5 段階の回答の算術平均をとったものを示すと、図 4.1 のようになる。2 つの項目に対する回答の平均は、満足度の平均とほぼ同じ値になっているが、「学生の質問に適切に対応してくれている」への回答の平均がやや高くなる傾向にある。

図 4.1 学生による授業評価の主な指標



出典) 教員、授業科目別アンケートリーダーチャート表。

学生からのコメント

学生による授業評価の自由記述には、例えば次のようなコメントがみられる。このように、授業の担当教員から受講生に(プレゼンテーションに対するコメント作成の)フィードバックを行うことで、授業に対する受講生のコミットメントを強めることができている。

「レポートを書いたら終わり(1度出せば終わり)」ではなく1度コメントを頂いて再度練り直して提出するのは理解が深まって良かったです。コメントしていただけることはとても嬉しいことでした。(学級集団心理学・生徒指導特論 平成20年度)

学生による授業評価の自由記述欄にコメントを記入してもらうにあたって、焦点を絞って記入してもらったことがある。以下のコメントは、受講生が自ら調査票の設計から実査までを行う教養教育の授業について、受講生の自主性をどこまで考慮すればいいかを検討するため、授業のアウトラインをどのくらい担当教員側でコントロールするのが望ましいと思うかを尋ねた結果である。

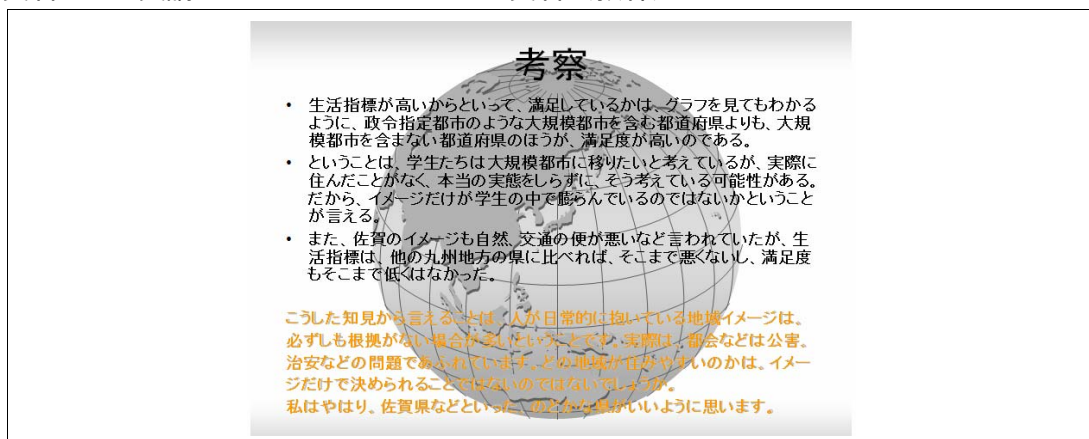
少人数だったため、先生と触れ合う機会も多くて楽しかったです。授業の方向性としてはある程度、先生がアウトラインを組んでおくのがいいと思うけど、学生の意見も要所所で取り入れた方がいいと思います。(進学・就職の地域間移動に見る佐賀 平成19年度)

また、佐賀大学では、卒業・修了予定者を対象としたアンケート調査も実施されており、「とても興味深い講義だった」(大学教育委員会・高等教育開発センター 2007, 佐賀大学共通アンケート調査報告書, 139頁)といったコメントが寄せられている。

5) 学習成果

受講生が私の授業を通して習得した内容を知るために主に利用しているのは、最終的に提出されるレポートやプレゼンテーションの内容等である。資料5.1の例では、受講生がプレゼンテーションに至るまでの過程で人文・社会科学の方法を用い、私の授業を受ける前に抱いていた理解とは異なった理解に至っていることがわかる。

資料5.1 受講生のプレゼンテーション資料(抜粋)



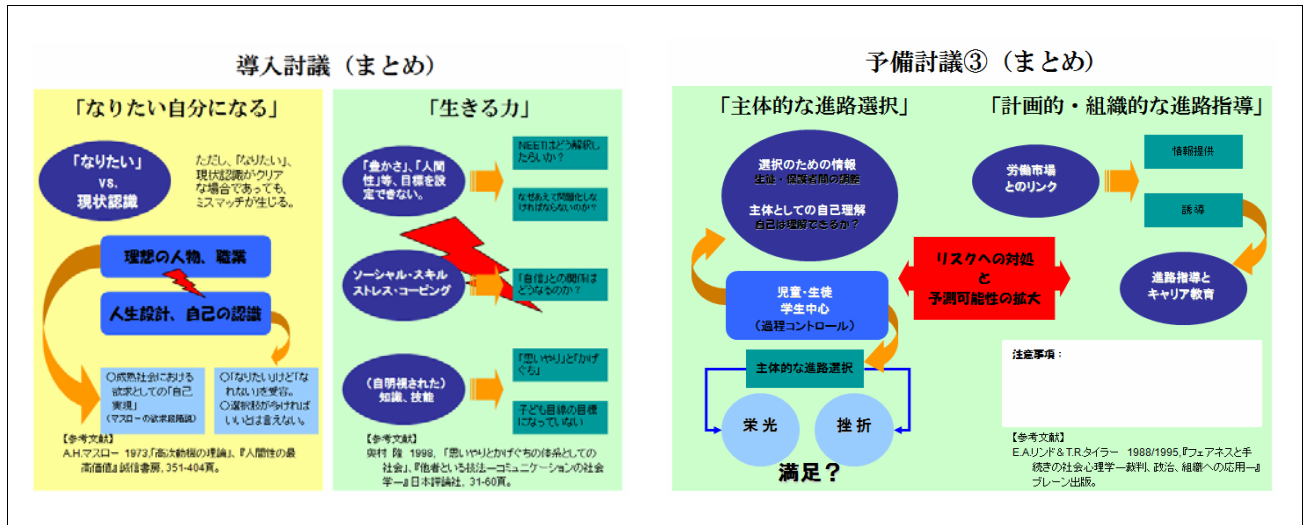
考察

- 生活指標が高いからといって、満足しているかは、グラフを見てもわかるように、政令指定都市のような大規模都市を含む都道府県よりも、大規模都市を含まない都道府県のほうが、満足度が高いのである。
- ということは、学生たちは大規模都市に移りたいと考えているが、実際に住んだことがなく、本当の実態を知らずに、そう考えている可能性がある。だから、イメージだけが学生の中で膨らんでいるのではないかということが言える。
- また、佐賀のイメージも自然、交通の便が悪いなど言われていたが、生活指標は、他の九州地方の県に比べれば、そこまで悪くないし、満足度もそこまで低くはなかった。

こうした知見から言えることは、人が日常的に抱いている地域イメージは、必ずしも根拠がない場合が多いということであり、実際は、都会などは公害、治安などの問題であってはいます。どの地域が住みやすいのかは、イメージだけで決められることではない、というのが、私はやはり、佐賀県などという、めだたから喜ばしいように思います。

出典)「進学・就職の地域間移動に見る佐賀」(平成19年度)のプレゼンテーション資料。

資料 5.2 受講生による討議内容を要約した配布資料



出典)「進路指導特別演習」(平成 19 年度)の配布資料。

ただし、最終的な提出物だけでは私の授業によって、受講生にどのような変化が生じているのかわからないこともある。このため、レポートやプレゼンテーションに先立って実施する討議内容のまとめ(資料 5.2)、小テストの結果なども合わせて利用する。小テストについては、これを複数回課すことによって、定期試験の客観式による出題で誤答しているケースを 10%程度に抑えることができている(添付資料 5-1)。

また、大学院の授業科目である場合、受講生が研究上の指導・助言を求めてくることがある。その中には、私の指導・助言に基づき、佐賀大学高等教育開発センターが刊行する大学教育年報に投稿し、掲載された受講生もいる(添付資料 5-2)。

6) 教育改善

授業の改善

学生による授業評価を含めた受講生からの提出物、他の教員から得た授業の工夫に関する情報などを参考にしながら、授業の改善に取り組んでいる(表 6.1)。取組の結果は学生による授業評価の満足度の平均が 1~5 段階の 4.0 以上である科目については年度間にあまり変わらないものの、満足度が平均 4.0 未満の授業科目である場合、平均得点がやや改善される傾向にある(資料 4.1【前掲】)。

表 6.1 学生による授業評価を用いた改善事例

改善事例の区分	改善の内容	授業科目
授業評価結果を教育の質の向上及び改善に結びつけた事例	<ul style="list-style-type: none"> 平成 19 年度の学生による授業評価結果に基づく平成 20 年度授業改善計画により、調査の実施、発表会に至るまでの手順をわかりやすい形でスライド資料にまとめ、配布・説明を行った。【添付資料 6-1】 	進学・就職の地域間移動に見る佐賀
	<ul style="list-style-type: none"> 平成 19 年度の学生による授業評価結果に基づく平成 20 年度授業改善計画により、題材を精選し、わかりやすい身近な例の解題のウェイトを大きくした。【添付資料 3-4】 	教育社会学

	<p>・平成 19 年度の学生による授業評価結果に基づく平成 20 年度授業改善計画により、受講生の興味とこの授業を通して伝達したい内容との距離が小さくなるよう、大多数の受講生にとって身近な例となる資料を配布・説明するようにした。【添付資料 6-2】</p>	学級集団心理学・生徒指導特論
	<p>・平成 19 年度の学生による授業評価結果に基づく平成 20 年度授業改善計画により、講義形式の回を 1 回減らして最新の調査データを分析した結果を紹介し、受講生から自由に質疑を受け、応答した。【添付資料 6-3】</p>	進路指導特別演習
FD を教育の質の向上及び改善に結びつけた事例	<p>・高等教育開発センターの HP「リレー・インタビュー」の内容を参考にしながら、学外での簡便な調査の実施方法を引き続き改善し、学生による授業評価の満足度が 4.25 となった。【図 4.1 参照】</p>	進学・就職の地域間移動に見る佐賀
学修指導上の工夫	<p>・受講生各自が（授業の目標から逸脱しない限りで）テーマを設定し、講師が提示するデータ一覧からテーマの説明に資するものを選択・分析するとともに、データを補完するためのインタビュー、質問紙調査を実施してもらい、問題発見能力、自立性の涵養を図った。【前掲 3）教育の方法 3 頁】</p>	進学・就職の地域間移動に見る佐賀
	<p>・佐賀の地域社会を概観するため、佐賀の地勢、佐賀の経済、佐賀の医療、佐賀の教育からなる 4 テーマを設定し、各テーマを専門領域とする教員が各回の授業を担当する形態を採用した。【添付資料 3-1】</p>	「佐賀」入門～本当の「佐賀」を探る～
	<p>・受講生全員にプレゼンテーションを義務付け、プレゼンテーションの内容に基づき、受講生 1 人ずつに対してコメントを作成し、最終的に提出するレポートの推敲に役立ててもらった。【添付資料 3-7】</p>	学級集団心理学・生徒指導特論
	<p>・講義による情報提供・総括と導入討議、3 回の予備討議を組み込み、自主的に思考し、発言する体制を採用するとともに、本討議を設定し、最終的に自らの思考がどの程度まで深まったのかを診断できるようにしている。【添付資料 3-1】</p>	進路指導特別演習

出典) 教員報告様式データ (平成 20 年度) のシート E6(2)(3), E7。

教育改善のための活動

授業の改善には直接に結びつけていなくても、教育改善に資する情報を収集しておくことには意義がある。私は、自分の授業を改善するために有益となりそうな情報を収集することを目的として、大学内外の教育研修等に参加している (表 6.2)。

表 6.2 教育研修等に参加したことによる成果

研修会等の名称	開催日	時間	概要	成果
第 13 回佐賀大学 FD・SD フォーラム	2008.7.16	2	<ul style="list-style-type: none"> ・「ブレンディッド型英語 e-ラーニング授業の可能性」 講師：早瀬 博範 (文化教育学部 教授) ・「数学『微分・積分学』(対面授業)において e-Learning を用いた自己学習の充実とリメディアルの実施例」 講師：池上 康之 (海洋エネルギー研究センター 教授) ・「物理専門教育での e-Learning による問題出題の実践例」 講師：船久保 公一 (理工学部 教授) 	e ラーニングを活用した自主的学習の方法について、参考となる情報を収集できた。

平成 20 年度大学教育 改革プログラム 合同フォーラム	2009. 01. ～ 2009. 01.	12	文部科学省の教育 GP や現代 GP、GCOE などの各プログラムが一堂に会し、基調講演、パネル・ディスカッション、分科会が開催され、優れた取組に関する情報提供がなされた。	授業の改善やカリキュラム開発等の FD のためのアイデアや、FD を組織的に実施する体制の整備に関する情報を収集できた。
第 5 回公開授業	2009. 2. 2	1. 5	農学部教授の近藤榮造先生の講義に参加し、学生の関心を引き付ける方法、教材の活用方法を中心に、授業改善のポイントを学んだ。	授業計画の詳細な設計の仕方、授業計画と当日配布資料との対応の取り方等、授業改善の手がかりが得られた。
第 14 回佐賀大学 FD・SD フォーラム	2009. 2. 24	2	・「中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」 諮問『中長期的な大学教育の在り方について』」 講師：荻上 紘一（大学評価・学位授与機構 教授）	今後、重要になる学習成果の指標、アドミッション戦略について、貴重な情報が得られた。

出典) 教員報告様式データ (平成 20 年度) のシート E6 「(1) 教育研修等への参加」。

7) 組織的な教育活動への貢献

教養教育運営機構への貢献

佐賀大学の教養教育を実施する組織として教養教育運営機構が設置されている。この教養教育運営機構からの依頼に応じて、第 54 回九州地区大学一般教育研究協議会の部会発表「授業の充実性を決めるもの」(添付資料 7-1)、第 58 回九州地区大学一般教育研究協議会の全体発表「地域をフィールドとした教育のメリットと課題」を行った(添付資料 7-2)。

また、平成 20 年度から教養教育運営機構の副機構長として、「教養教育の履修・広報に関するアンケート」(添付資料 U) を実施し、その結果から得られた学生からの意見や要望に基づき、教養教育運営機構のホームページに「履修相談 Q&A」を設けるとともに、リーフレットを作成して学生に配布した(添付資料 7-3)

大学教育の自己点検・評価

高等教育開発センターに設置されている企画評価部門の専任教員として、「佐賀大学学生アンケート」、「佐賀大学共通アンケート(卒業・修了予定者対象)」などの調査報告書の作成に従事している(添付資料 7-4)。また、評価室の室員として、法人評価や大学機関別認証評価など、各種評価業務を担い、佐賀大学における教育活動の自己点検・評価に貢献している。

大学教育に関する調査研究

佐賀大学における教養教育のあり方を検討するため、信州大学全学教育機構を訪問調査した(添付資料 7-5)。秋期入学のあり方を検討するための情報収集の一環として、秋季入学を導入している国際教養大学を訪問調査し、9 月入学に関する調査結果にまとめた(添付資料 7-6)。

また、第 11 回大学教育研究フォーラムの授業研究部会において、「授業秩序をめぐる教師と学生の

相互作用—授業設計の基礎的な視点の導出—と題し、授業の成り立ちを分析するための調査データの分析を行い、発表している（添付資料 7-7）。

その他、科学研究費補助金基盤研究 A「企業・卒業生による大学教育の成果の点検・評価に関する日欧比較研究」（代表：吉本圭一・九州大学教授）に研究分担者として参加し、日本教育社会学会第 60 回大会にて「大学教育の受容メカニズムをめぐる日欧比較—11 カ国の OECD 加盟国を中心として—」と題する報告を行った（添付資料 7-8）。現在、科学研究費補助金若手研究 B「地方自治体による学力調査の展開過程における大学の教育研究の役割に関する定性的研究」（代表：村山詩帆・佐賀大学准教授）、文部科学省の先導的・大学改革推進委託事業「大学における教育内容・方法等の大学教育改革に関する調査分析」（代表：浅原利正・広島大学学長）等による調査研究に取り組んでいる（添付資料 7-9 及び 7-10）。

教育に関する賞

2008 年度に、大学の教育改革に貢献したという名目で、国立大学法人佐賀大学教育功績等表彰規程（推薦基準第 2 条第 4 号）に基づき、学長から教育功績等表彰を受けた（添付資料 7-11）。

8) 今後の目標

長期的には、次世代の担い手である佐賀大学の学生が目先の利益を大きくすることばかりでなく、長い目でみた社会的な望ましさを念頭に考え、行動できるよう、学修支援の環境を堅実に築いていきたい。短期的には、社会的な望ましさに考慮することのメリット・デメリットを受講生に問いかけながら、受講生が授業へのコミットメントを強めてくれるよう働きかけていくことを予定している。

2010～2011 年度については、当面、以下のように目標を定めた。

- (1) 受講生にグループ作業をしてもらう場合、作業にかかる労力負担が受講生間で違ってくることがあるため、できるだけ等しくグループ作業に参加してもらう方法について検討する。
- (2) 少人数の授業（大学院）について、スライドを使うのを止めて、紙媒体の配布資料に戻すべきかどうかについて検討する。
- (3) 討議の技法を身に付けるための効果的な方法に関するワークショップ等に参加する。
- (4) オフィスアワー週 2 コマを確保し、なるべく会議を入れない。